

土や国の発展を願う心

人としての  
あるべき姿

かけがえない命、  
生と死の重さ

人を思いやる心、  
人とのつながり

この世に生きること  
の意味、素晴らしさ

自分のはぐくみ、  
責任ある行動

人間としてよりよく生きるために  
自分を見つめ 一人ひとりの  
自然や崇高なものとのつながり 一人ひとりの  
集団や社会とのつながり  
について、上記の6つのテーマで学び合う

6つのテーマを  
自分のハートで  
考える!!

# 「のとびら」とは

「のとびら」とは、  
「よいことを考えるための学習資料集です。  
よいことの基本について学びながら、一人一人に  
応じます。」

## 「特別書き下ろし文」資料

執筆者からの  
応援メッセージ付き  
「児童生徒作文」資料

### 執筆者

#### 小学校・低学年編

- 今江 祥智
- 内田 奈織
- 梅原 猛
- 江口 克彦
- 梶田 真章
- 河合 雅雄
- 久木 久代
- 澤田 ふじ子
- 瀬尾 まいこ
- 武田 美保
- 永田 和宏
- 永田 萌
- 中西 進
- 西本 吉生
- 畠中 光享
- 日野原 重明
- 松尾 心空
- 山折 哲雄
- 山本 兼一

#### 小学校・中学年編

- 石川 九楊
- 岡田 節人
- 梶田 真章
- 河合 雅雄
- 河野 昭一
- 久木 久代
- 佐渡 裕
- 武田 美保
- 坪内 稔典
- 徳川 輝尚
- 西本 吉生
- 日高 敏隆
- 本庶 佑
- 松尾 心空
- 村井 康彦
- 山本 兼一
- 鷲田 清一

#### 小学校・高学年編

- 安藤 仁介
- 伊藤 謙介
- 上田 正昭
- 梶田 真章
- 河合 雅雄
- 木田 安彦
- 衣笠 祥雄
- 久木 久代
- 小寺 正一
- 崔 善今
- 澤田 淳
- 茂山 千三郎
- 志村 ふくみ
- 鈴木 俊哉
- 千 玄室
- 坪内 稔典
- 徳川 輝尚
- ドナルド=キーン
- 中西 進
- 西本 吉生
- 日高 敏隆
- 松尾 心空
- 山折 哲雄
- 山本 兼一

#### 中学校編

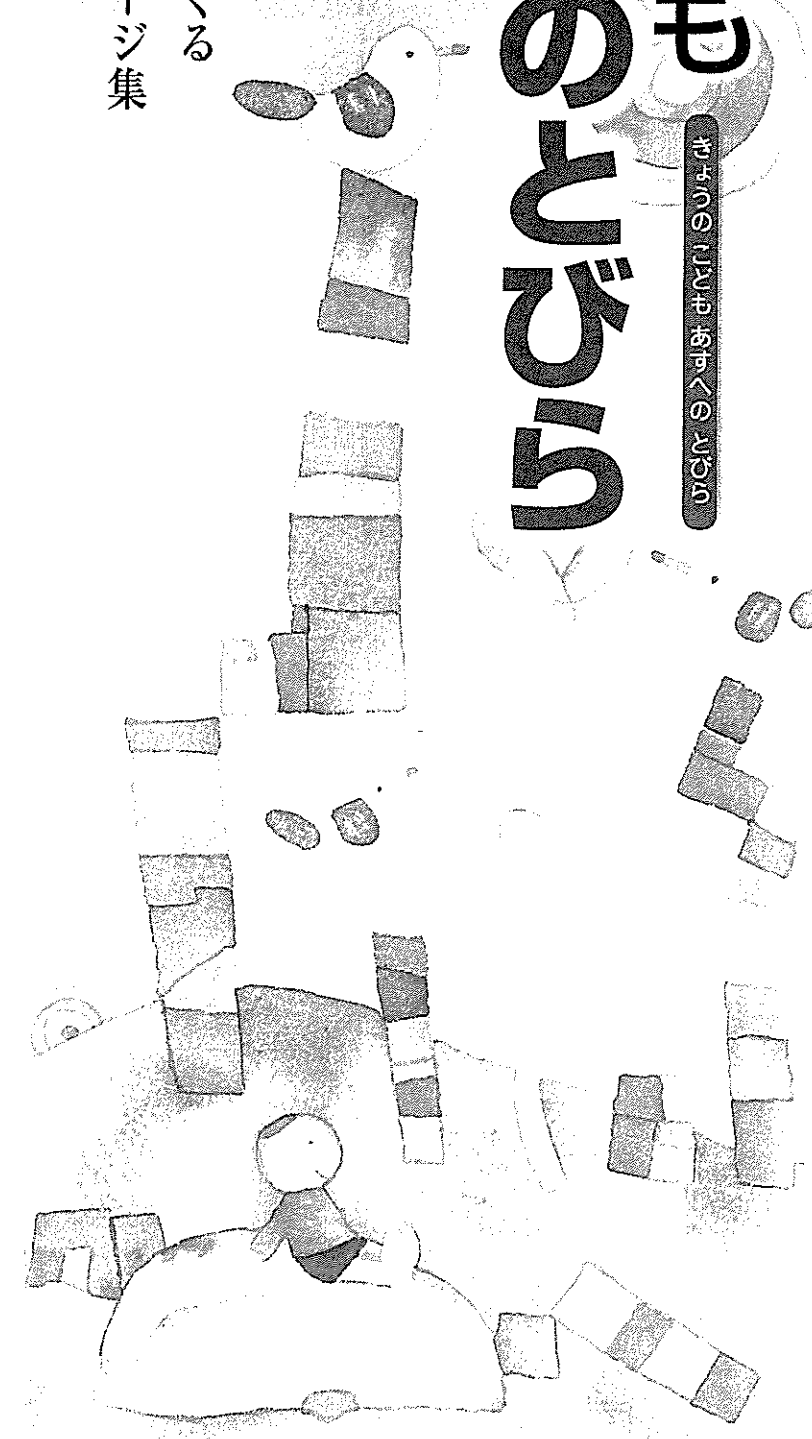
- 伊藤 謙介
- 稲盛 和夫
- 上田 正昭
- 梅原 猛
- 梶田 真章
- 河合 雅雄
- 久木 久代
- 小寺 正一
- 澤田 淳
- 千 玄室
- 龍村 仁
- 曹 承鉉
- 徳川 輝尚
- 中西 進
- 中村 桂子
- 西島 安則
- 平田 眞貴子
- 廣瀬 量平
- 向山 ひろ子
- 村田 純一
- 山折 哲雄

(敬称略 50音順)

このリーフレットは再生紙を使用しています

# 京の子どもも明日へのびら

京都の英知を結集して  
京の子どもたちにおくる  
生き方応援メッセージ集



人間の知恵から学ぶ  
WISDOM  
英知

京都らしさを大切に  
MADE IN  
KYOTO  
京都

キーワードは  
WARM  
ぬくもり

学校・家庭・社会で生きる  
ACTIVITY  
活力

みんなの気持ちをつなぐ  
RESPONSE  
共感

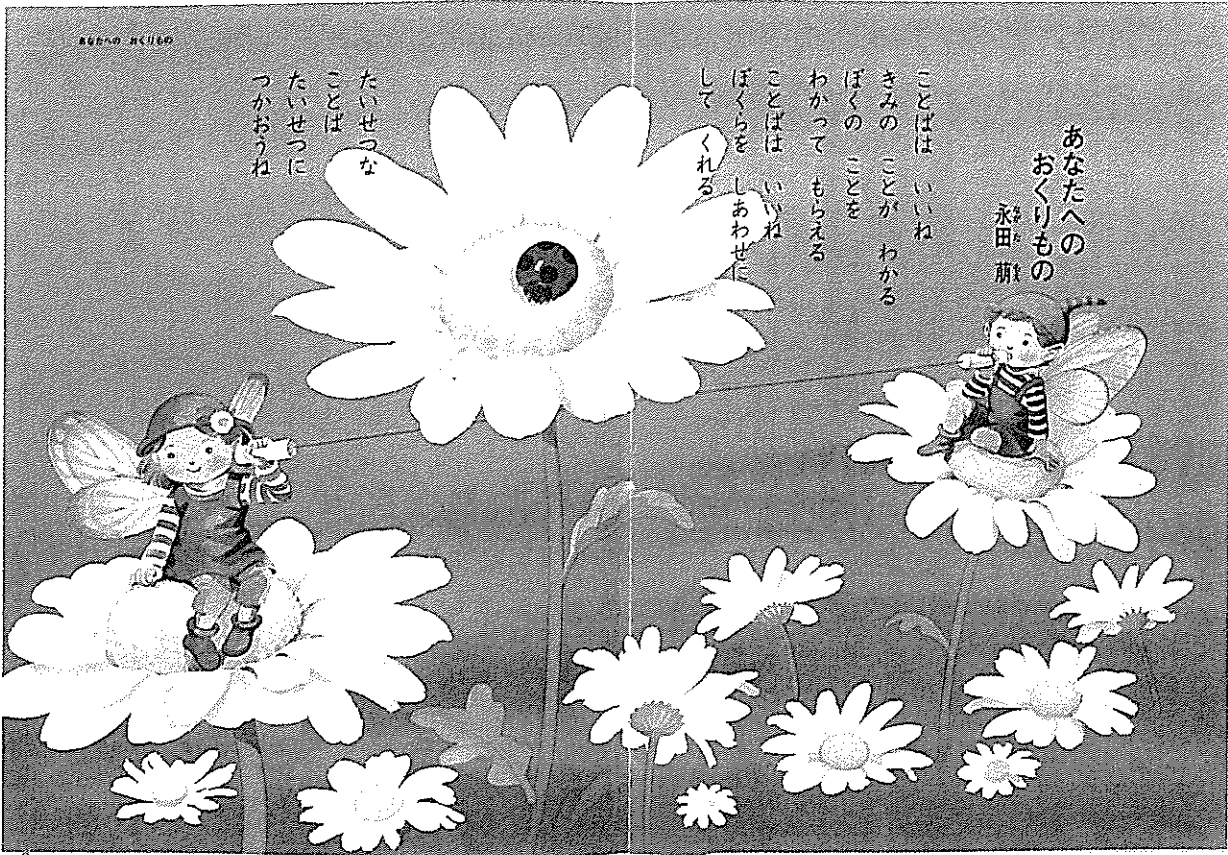
人間としての心のぬくもりをはぐくむ

## 「京の子どもも明日へのびら」

人間として、しあわせに生きていくために、ど  
京都府の子どもたちが人間としてよりよく生  
豊かな心がはぐくまれることを願って作成し

## 京都にゆかりのある文化人

京の子どもの健やかな成長を励ます  
「府民ほっとメッセージ」(スポット資料)  
◇きみも身につけよう、社会のマナーやルール  
◇こんなすてきな子どもに出会いました



あなたへの  
おくりもの  
永田 萌

ことばは いいね  
きみの ことが わかる  
ぼくの ことを  
わかって もらえる  
ことばは いいね  
ぼくらを しあわせに  
してくる

たいせつな  
ことば  
たいせつに  
つかおうね

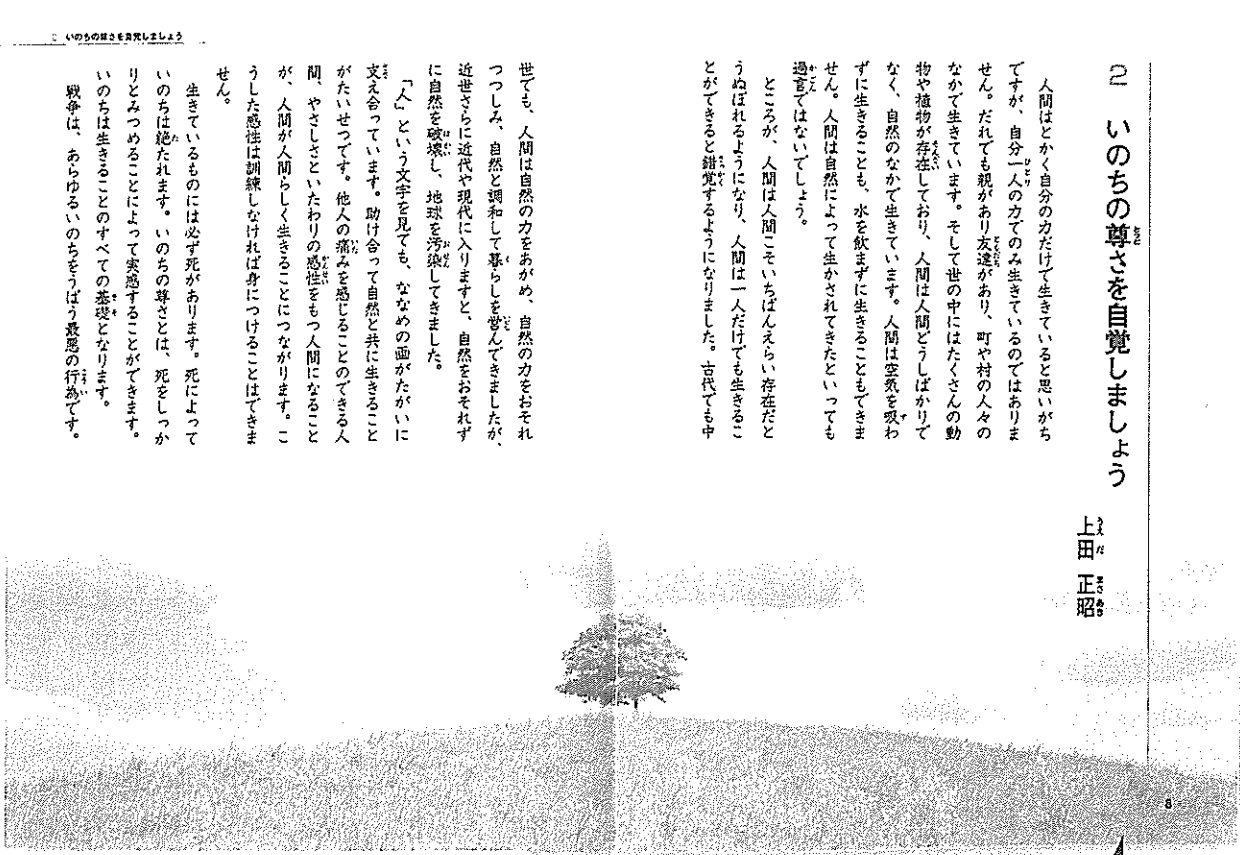
本文は次ページに続く

小学校・低学年編 (例)

小学校・中学年編 (例)

京都にゆかりのある文化人や学識経験者等、  
各界、各分野で御活躍の皆様による、  
50編を超える子ども向け書き下ろし文を中心に

# 小学校3編 中学校1編 の4分冊作成



いのちの尊厳を自覚しよう

上田 正昭

人間はどうか自分の力だけで生きていくと思いがちですが、自分一人の力で生きていくのはありません。だれも親がいたり友達がいり、町や村の人々のなかで生きています。そして世の中にはたくさんの動物や植物が存在しており、人間は人間どうしばかりでなく、自然のなかで生きています。人間は空気を吸わずに生きていくことも、水を飲まずに生きていくこともできません。人間は自然によって生かされてきたといっても過言ではないでしょう。

ところが、人間は人間といえども限りある存在だとうぬぼれるようになり、人間は一人だけでも生きていくことができる錯覚するようになりました。古代でも中世でも、人間は自然の力をあがめ、自然の力をおそれつつも、自然と調和して暮らしを営んできましたが、近世さらに近代や現代に入りまして、自然をおそれずに自然を破壊し、地球を汚染してきました。

「人」という文字を見ても、空なみの画がたがいに支え合っています。助け合って自然と共に生きることがたいせつです。他人の痛みを感じることのできる人間、やさしさというわりの感性をもつ人間になることが、人間が人間らしく生きることに繋がります。こうした感性は訓練しなければ身につけることはできません。

生きていくものには必ず死があります。死によっていのちは絶たれます。いのちの尊厳とは、死をしっかりとつめとめることによって実感することができるといいます。いのちが生きることにすべての基礎となります。戦争は、あらゆるいのちをうばう最悪の行状です。

本文は次ページに続く

小学校・高学年編 (例)

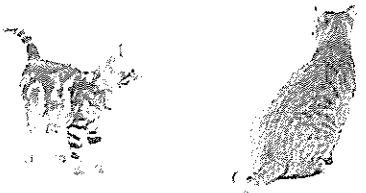
中学校編 (例)

「どいてー」と言ってもせつないにどいてはしません。自分のしたいことばかりして、人の言うことなんか聞かないのです。犬だったら、かい主の命令にすぐしたがうのに……」

どうしてねこは、こんなにわがままなのでしょう？  
それは、ねこがわれをつくって生きる動物ではないからです。

犬はそれそのオオカミと同じく、何びきかておれになつてくらす動物です。おれの中の犬たちは、自分たちのリーダーにちゃんとしたが、自分勝手なことはしません。そうしないと、おれから追い出されてしまうからです。

犬はもともとそういう生き方をしてきた動物なので、人間にかわれるようになってからも、かい主を自分のリーダーだと思っているのです。だからちゃんとかい主の言うことを聞くのです。



本文は次ページに続く

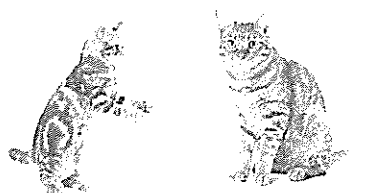
12 **ねこはどこまでわがままか——人はどこまで動物か——**

ぼくの家には、もう三十年以上昔から、いつもねこがいました。

もちろん同じ一びきのねこがずっといたというわけはありません。新しいねこに入れかわりながらだっただけですが、ねこがいないという時期はありませんでした。今も一びきのねこがいます。

こんなに長い間ねこいっしょにいると、「ねこってほんとうにわがままだな。」と思うことがよくあります。

「おいてー」とよんでもせつないに来てくれません。ところが、どっせん何をもったか、ぼくが読んでいた新聞の上によつて来てすわりこんでしまったりします。そういうときは、



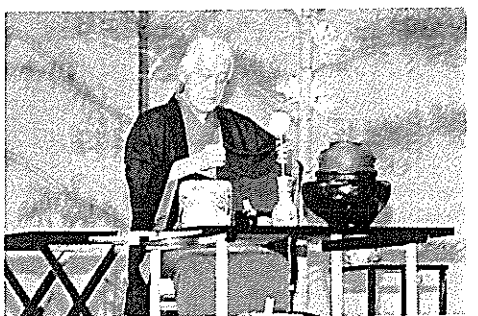
日高 敏隆

わたしの胸内にはつきりと焼ついていて、います。そして、それがわたしの根幹する「根幹からスフォルネ」の理念の精神的支柱となっているのです。

昭和二十年（一九四五年）五月、沖縄攻撃が激しくなつたとき、わたしは徳島県の航空隊に在籍していましたが、その際にいっしょに飛行機に乗っていたのが、先任となりなつたテレビ番組の「水戸黄門」で活躍した俳優の菅原さんです。いつも共に飛行機に乗って、厳しい訓練を受けました。

それ以前の四月からは、いよいよ訓練命令が下りそうを命じた状況でした。そのときは皆で、いっしょに死のうと約束しました。ある日、飛行機がわつてから、わたしは指揮官の座を担ったので、五六人の仲間といっしょに飛行機を着たまでお茶をいしました。飛行機がわつたので車にのり、お茶を一杯飲んだのです。

そして、仲間一人が、千代、他が生きて帰ったなら、お茶のこの茶室で茶を飲ませてください、と言いました。わたしは、その言葉がぐつと胸に刺さりました。出陣したら、生きては帰



4分冊・菅原大島・徳島県航空隊、戦時中の写真（平成18年）

本文は次ページに続く

16 **一期一会の教え——平和への祈りを深める——**

皆さんは、二十一世紀後半に、果たして日本の姿はどうなっているだろうか、と想像したことがありますか？

わたしは、政治、経済、文化という根本的な問題から考え、このまの調子で進んだら、日本がふたたび返つたとき、世界中でただ一回取り残されているのではないかと思っています。

太平洋戦争後、アメリカ社会を模倣する社会の目標として進んできた我が国は、経済発展で世界中が目を注ぎ、その成長を遂げた反面、人心の荒廃と精神的空虚化において世界において注目され、外国の要人から「かつて日本という国があった」といわれるような、日本社会に対する見方もあるほどです。

我が子でも育てられない、親を老死的な苦痛の惨状を見つめた行状を繰り返す者たちを見て

戦後五十年の秋のひびきとそのまま表面に吹き上がってきた思ひを覚えません。五十年の間にひびきた社会を正すには、それ以上に相違の時間がかかると思われず。

しかし、何れかすると、日本の皆さんは強く願うことは、温かい人間関係が息づく社会、能の中をつく努力を怠らぬということです。

自分が少しでも人にも役に立ち、一番を目指すべき社会ではなく、これからは一人一人の人間が「MAY OSEKI」かけがえない自分として、みんなの中で生かされる中、生かされるべきではないと思っています。

わたしは、かつて海軍特別攻撃隊の一日として戦争を体験しましたが、そのとき、戦場に散らした思い、悔悟の涙は、いまでも色あせぬことなく、今もなお

千代 玄堂